2009年11月29日　中標津教会礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙12章1～8節

説教題：からだをささげることの恵み

はじめに

今回、このように修養会のご奉仕と説教のご奉仕にお招きいただき、豊かにお交わりの機会をいただけましたことを主に感謝申し上げます。今回は、ローマ人への手紙から学ぶということで、六回にわたる学びにも熱心に参加される姿を拝見し、みことばに対する姿勢というものをこちらが逆に教えられる思いです。

今朝はともにローマ人への手紙12章の最初の所を開いております。この手紙を読んですっきりとわかるという方はあまりいないのではないかと思います。部分部分はなんとなく理解できるけれども、全体として何が書いてあるのかわかりにくいという方がずっと多いはずです

今朝の箇所の1節には、「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」とあります。ことばの意味はわかります。しかし、では具体的にどうしたらいいのか、そこがわかりにくい。今朝はそこに焦点を当てて、ともに考えてまいります。

1　「ささげる」ことの意味

（1）聖い動物をささげる

修養会でも触れたことなのですが、1節で使われている「ささげる」は特別な意味が込められています。旧約聖書を見るとすぐにわかりますが、イスラエルの人たちは、神に礼拝をささげるとき、牛とか羊とか動物をささげるようにと命じられていました。パウロは、そのことと重ね合わせながら「ささげなさい」と言っています。ささげられた動物は、ほふられ、血を流し、皮をはぎ、部分部分に切り分けられて、最後は全焼のいけにえとして焼かれていきました。

どんな動物がささげられたのでしょうか。レビ記1章3節にこうあります。「もしささげ物が、牛の全焼のいけにえであれば、傷のない雄牛をささげなければならない。」人々が動物を連れてきますと、祭司がそれを見て検査をいたします。もし少しでも傷があるようなら、それはいけにえにはふさわしくないと突き返されました。主にささげる動物は完全な状態でなければなりませんでした。

（2）でも、からだはきよくない！

パウロは「あなたがたのからだを、ささげなさい」と言っています。律法に照らしますと、神にささげる物はきよくて完全な物でなければなりません。では、この私たちのからだは完全でしょうか。傷のないからだなのでしょうか。

パウロは何と言っていたか。7章25節の後半。「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪に律法に仕えているのです。」パウロははっきりと自分のからだの中に罪が住みついていると告白しました。

パウロの告白は他人事ではありません。まさに私たちの告白そのものです。恵みによって救われても、聖書のみことばを読むたびごとに、自分の罪が思い出されて悲しくなる。苦しくなる。もう同じ罪を繰り返してはなら

ないと思うのだけれど、何度も繰り返してしまう。そういう日々を過ごしてはいないですか。神の目からご覧になったなら、どう見てもこのからだは聖くはありません。

それなのにパウロは、「あなたがたのからだを、聖い、生きた供え物としてささげなさい」と言っています。どういう意味なのでしょう。きよくないからだを頑張って努力してきよくさせなさい。もしそうであるなら、プレッシャーを受けてつらくなります。

安心してください。パウロは私たちを苦しめるためにこんなことを言っているのではありません。そもそもパウロも言っているように、私たちは人間の努力によってきよくなることなどできません。ではどういうことか。そのことを次に見てまいります。

2　思い上がっていたローマの人たち

（1）「私は正しい」

ローマ人への手紙は、当時のローマの教会に起きた大きな問題について、それを伝え聞いたパウロが心を痛めて書いた手紙であるといわれています。当時ローマは世界中の人たちが集まってくる国際都市でした。教会にもいろいろな国籍の人たちが集ってきます。その中にはユダヤ人も大勢いた。徐々にユダヤ人とそうでない異邦人クリスチャンとの間に溝ができてしまいます。ユダヤ人は律法を大切にするべきだと主張しました。異邦人クリスチャンは、いや、律法はもう私たちには何も関係がないと主張し、お互いが自分は正しいと主張して対立していました。どちらとも聖書を土台として譲らない。

（2）信仰の量りに応じて

教会の中でも、ある人はこうすべきだと言い、別の人たちは、いやそうすべきではないと言って譲らない。そういうことが起きます。ともに聖書のみことばを持ち出してきます。もちろんみことばに忠実でありたいと願う熱心さにかけては、どちらも同じです。けれども主張する内容が真っ向から対立する。そんなとき私たちは、どちらが正しいのかと悩むことがあります。

ではパウロはどのような視点からこの問題を見ようとしたでしょうか。３節にこうあります。「誰でも、思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」

私たちはしばしば聖書を持ち出してきて「ここにこう書いてあるのだからこうすべきだ」と強く自分の意見を主張したくなることがあります。自分は間違っているとは思っていません。ところが、パウロに言わせると、そうではない。あなたは「思うべき限度を超えて思い上がっている。」言い換えれば高慢になっていると指摘します。

私たちは自分の限度がわかりません。ですから限度をを超えて思い上がるなと言われても、私は大丈夫と楽観する。信仰の量りに応じてと言われても、信仰の量りは沢山あるように思い込んでいますから、慎み深く考えることは難しい。

しかし、実はそうではない。私たちの信仰の量りは自分が思っている以上に小さい。その実例を二つあげてみます。

（3）失敗１：ほかの人と比べて落ち込む「私はできない」

皆さんはこんなことを経験したことはな

いですか。教会の中ですばらしく奉仕される兄弟や姉妹がおられます。その人はあらゆることで自分を犠牲にして、時間をささげ、能力をささげ、神さまのために奉仕している。皆もそのことを高く評価している。そんな兄弟姉妹を見て、そうか神さまに喜んでいただけるためには、自分もあれくらい奉仕しなければならないのだと思い、同じようになろうとする。しかしやがて疲れ果ててしまう。「私は落ちこぼれクリスチャン」と落ち込んでしまう。これが一つめの失敗です。

（4）失敗２：ほかの人に押しつける「あなたもすべきだ」

二つめの例は逆のパターンです。私はこれだけ頑張って奉仕しているのに、どうしてあなたはしないのか。そういう苦々しい思いです。もちろん口に出して言うわけではありません。でも、自分が頑張れば頑張るほど、他の人たちがのんきにしているように思えて腹が立ってくる。そんなことありませんか。

今、よくありがちな二つのケースを取りあげましたが、パウロに言わせると、どちらの問題も原因は同じ所にある。自分の限度を超えて考えてしまうから、こんなことになる。パウロはこう言っています。4 節。「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きをしない。」6 節。「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っている。」

教会の中の様々なトラブルの多くは、この視点がすっぽりと抜け落ちていくことから起きていくような気がします。私たちはそれぞれ違う賜物を持っている。それはだれでも頭ではわかっているつもりです。ところが、実際の奉仕のこととなると、古い考え方が頭をもたげてきます。日本文化は横並びの文化だと言われます。その習慣が信仰の中に持ち込まれてしまう。「この世と調子を合わせる」生き方にすり替わっていくのです。

３　ささげることの恵み

（1）傷のあるからだをどうやってささげるのか

私たちは、奉仕のことや、信仰のことで、あの人と同じようになれないという劣等感のようなものをずっと抱え込むことがあります。あるいは、どうしてあの人たちは教会の行事になかなか協力しないのか。そんなことで腹を立ててることがあります。聖書によれば、それは思うべき限度を超えて思い上がり、罪を犯していることになる。神の前では聖い者ではない。このままでは聖い供え物とはなりません。

（2）キリストによる解決

では、どうやったら聖い供え物となるのでしょう。どうすれば神に受け入れられるものとなるのでしょうか。神は私たちの弱さをよくご存じですから、二つの解決を与えてくださいました。一つめがキリストによる解決です。

先ほども触れたことですが、私たちが弱くなっている原因はこのからだにあります。からだの中に罪が宿っていて、それが私たちを苦しめている。神はそれがどれだけ大変なことなのかよくご存じです。８章３節の後半。「神は自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

イエス・キリストがなぜ十字架でご自分のからだをささげてくださる、そんな必要が

あったのか。ここにすべての理由が書かれています。他に方法はありませんでした。この肉のからだにおいて罪が処罰される必要があったということです。

（3）御霊による励まし

二つめの解決は、御霊による励ましです。これも修養会で触れてきたことですが、私たちは信じて救われた後、天の御国に入るまでのしばらくの間、この弱いからだを身にまとっていなければならない。言わば矛盾した状態に置かれているのですから、当然そこで苦しむことになります。そのことも神はご存じであって、私たちが気落ちすることがないようにと、御霊を送ってくださいました。パウロは不思議な表現をしています。8 章 9 節。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。」私たちは肉という衣をまとっているのですが、神の目からご覧になると、御霊という衣をまとっている、御霊の中に私たちが入っている。そんなふうに見えている。そういうことだと思うのです。

確かに肉の弱さが襲ってきて、聖さとは正反対のこのからだであるけれど、御霊が私たちを包んでいるので、私たちはきよくさせられていく。御霊はそのように働いて下さっています。

私たちは自分の本当の姿を見たとき、こう祈らざるを得なくなります。「私たちのからだは確かにきよくありません。罪に汚れています。思う限度を超えて思い上がるような私です。主よ、そんな私をあわれんでください。私は聖くはない。私は聖書を振りかざして自分の正しさを人に押しつける傲慢な者です。」

神はこの祈りを聞かれて、どうされるのですか。あわれみの神は、私たちの弱さを包み込む方ではないですか。きよくない者を、十字架の血潮できよくしてくださる方ではないですか。御霊は、このような弱い私たちを父なる神に対して証しして下さるのではないですか。

パウロは言います。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」自分の弱さと罪を告白していくとき、神は大きな恵みを与えて下さいます。

（4）ひとりひとりの変化が教会を形作る

ここまでどちらかと言うと個人的な信仰の歩みについて話しました。しかし、この変化は個人レベルで終わるのではないことを最後に触れておきたい。パウロも言うように、私たちはキリストのからだにつながっていて、そこでひとりひとり異なる働きをしています。あの人と同じように働かなければと思う必要はありません。あの人も私と同じように働くべきだと思う必要もない。それぞれが、神さまから信仰が分け与えられている。その違いは最初なかなかわかりません。でもお互いが慎み深くなっていったならどうなるでしょう。お互いをさばくことはなくなります。だって、ひとりひとりが違うのです。それを聞くと、世の人たちは心配します。みんな違っていたら、ばらばらになるだけだ。

心配ありません。キリストのからだは本当にすばらしい。違う個性が集められているところに、美しいハーモニーが奏でられていく。それが教会だと思うのです。

最初はお互いが違うこと受け入れられなかったかもしれません。でも、キリストは互いの違いを喜んで下さっている。私たちもそのように互いに対して慎み深くありたい。そこに主の恵みが豊かに注がれていきます。